

〔自著紹介〕

仁藤智子

シリーズ古代史をひらくⅡ
古代王権 王はどうして
生まれたか

岩波書店 2024年



「王権というのは目に見えないですよ。なので、それを可視化する必要がありました。それにはモノとして可視化する仕方と、行為、つまり儀礼や祭祀という形で可視化する、という二つのやり方があるのだと思っています」（本書343頁）。

王権とは何か、という多くの人の問いに答えるべく、7名の研究者が一年以上に及ぶ勉強会を重ねて作った一冊である。考古学を専門とする岩永省三・辻田淳一郎、文献史学の藤森健太郎と筆者、外国人研究者による文学からのアプローチとしてジェイスン・P・ウェップの論を、古代史界を長年リードしてきた吉村武彦がまとめる。

（本書の構成）

〈古代王権〉を考える……吉村武彦

「王」になった大首長——弥生社会の変貌……岩永省三

ヤマト王権の威信財とレガリア……辻田淳一郎

古代の皇位継承と天皇の即位……藤森健太郎

古代王権の由緒と正統性——東アジアにおける国家祭祀と王権儀礼……仁藤智子

《個別テーマをひらく》

文人が創り上げた天皇像……ジェイスン・P・ウェップ

《座談会》古代日本における〈王権〉とは

（吉村武彦、岩永省三、辻田淳一郎、藤森健太郎、仁藤智子、川尻秋生）

最初に《座談会》を読むと、それぞれの筆者が「王」「王権」をどのように考えているのか、どのような討論を積み重ねてきたか、そして何を目指しているのかが端的にわかりやすい。本書では時系列に論が展開し、「王」になること、「王」

であること、「王」を継承することが、異なる研究手法を持つ考古学・歴史学・文学によって論じられてく。

そのなかで、筆者は、六世紀末から九世紀までの、「王を、王たらしめている由緒と正統性」を担保する祭祀と儀礼に焦点を当てて考察する。国家祭祀である①祖先祭祀としての宗廟制、②天と地の祭祀としての昊天祭祀（郊祀）が、中国の周辺に当たる日本列島や朝鮮半島において、どのように継受されたのか、あるいは受容されなかったのかという視点から検討を重ねた。その成果として、日本の古代王権の特質は、中国の礼制を取捨選択し、あるいは換骨奪胎して、独自の論理によって儀礼や祭祀を実施していたところに見出すことができると結論付ける。宗廟制は受容されず、天孫降臨神話と矛盾をきたす昊天祭祀も似て非なるものとして限定的に行われたにすぎなかった。これらとは別に、日本独自の山陵祭祀を創設・展開することによって、「王権の由緒と正統性」を可視化したことを明らかにした。律令制の継受によって、中国化（唐風化）したように評価されてきた日本古代国家の、別の側面に気がつくのではないだろうか。

平安時代 天皇列伝

桓武天皇から安徳天皇まで

戎光祥出版 2023年



平安京への遷都を実現した桓武天皇から、源平合戦（治承寿永の内乱）のさなかに壇ノ浦にて海中に没した安徳天皇まで、32名の天皇を取り上げ、天皇にまつわりエピソードや治世の出来事を述べる。編者である栗山圭子・樋口健太郎を含む14名が、最新の研究成果を反映させた記述を展開する。筆者は、

清和天皇一史上最初の幼帝の誕生

陽成天皇一憶測をよぶ突然の退位

を担当執筆した。

清和天皇は、周知のごとく日本史上初めての幼帝として登場した。幼帝出現の史的意義については、拙稿「幼帝の出現と皇位継承」（『天皇はいかに受け継がれ

たか一天皇の身体と皇位継承』所収、2019年2月、績文堂）と「平安初期の王権」（『古代王権の史実と虚構』所収、2019年2月、竹林舎）を合わせて参照されたい。

本章では、清和朝の出来事として、十陵四墓制による山陵祭祀の整備、貞観大地震などの災異と御霊会^{ごりょうえ}の成立、応天門の炎上に起因する政治疑獄事件（応天門の変）、『貞観格』『貞観式』『貞観交替式』などの法令の整備と編纂事業などを紹介した。貞観大地震は、東日本大震災によって改めて注目されるようになったが、この時代はそれだけでなく、富士山の噴火などの大きな災害が続いた。災異に翻弄された時期でもあった。

陽成天皇も幼帝として即位したが、蝦夷との衝突（元慶^{がんぎょう}の乱）が起き、国家財政の悪化からの打開策（元慶官田）が求められ、さらには摂政・藤原基経と生母高子の兄妹の確執などに悩まされた。17歳での突然の退位は、皇統の断絶と政治的混乱を招いた。この退位によって空位となった皇位をめぐって、次のようなエピソードが『恒貞親王伝』^{つねさだ}から知られる。

ある日、太政大臣の藤原基経が、左大臣源融らが、一人の僧侶のもとを訪ねた。僧侶の名は恒寂。彼に向って、「還俗して皇位をついてほしい」と持ち掛けたのであった。恒寂は固辞し、最後まで話し合いは平行線をたどった。根負けした基経は王統をさかのぼり、当時55歳であった仁明天皇の光孝天皇が即位した。この恒寂とは、淳和天皇と正子皇后（嵯峨天皇皇女）との間に生まれた恒貞親王である。彼は、幼くして仁明天皇の皇太子に立てられ、842年の承和^{じょうわ}の変において無実ながら廢太子された人物である。仏道に帰依し、心穏やかな修行の日々を送っていたが、先述した藤原基経の来訪によって大きく変わろうとしていた。皇位継承を固辞した恒寂は、889年9月に己の死期を悟り、西方に向かって結跏趺坐して入滅したという。一方で、退位した陽成院はその後50年余り生き、949年に没した。

数奇な運命をたどった平安時代の天皇の実像を、紐解いていただければ幸いである。